

烈しく攻むるもの、エイハブの子等

—フラナリー・オコナーの二長編より—

後藤和彦

「人間、壁をおちやぶるなら、その仮面をおちやぶれ！ 囚人が壁を打ち破らんで外へ出られるか？ このおれには、あの白鯨が壁になって、身近に立ちただかっているのだ。そりゃ、壁の向う側には何もないと思うこともある。だがそれでも同じじゃ。あいつがおれに働きかけ、おれにのしかかってくる。底知れぬ邪悪な底意をかためて、猛だけしい獰悪な力で来るのが、おれにはよくわかる。その底知れぬものが、何よりもおれは憎い。白鯨が、あの邪悪なものの使いであろうと、また本体であろうと、その憎しみをば彼奴によって晴らしたいのだ。のう、おれを潰神じゃなどというってくれるな。侮辱されたら太陽にでもうちかかるおれだ、もし太陽が侮辱してもよいなら、おれが殴りつけてもよいはずだからな。」¹

本稿はフラナリー・オコナーの二長編小説『賢い血』と『烈しく攻むるものはこれを奪う』の主人公、ヘイゼル・モール（Hazel Motes）とフランシス・ターウォーター（Francis Tarwater）の二人が、ある重要なアспектにおいて、ハーマン・メルヴィルの代表作『白鯨』のエイハブの正統な末裔であることを明らかにするという主旨をもって書かれたものである。

Wise Blood : Hazel Motes, the Impatient

『賢い血』の主人公ヘイゼル・モーツは待つことのできぬ青年である。彼は時を待てない。内なる衝動のままに行動し、いささかも逡巡することはない。その行動が結果となってあらわれる間もなく彼は自らを次なる行動へと駆りたてる別の衝動に襲われている。

時のもたらすものを淡々と受け容れてなお時に欺かれず、針の一本しかない時計を持ってなお時に遅れないあの女ディルシーの行動の着実さは、ヘイゼル・モーツとは全く無縁のものだ。同じ『響きと怒り』の登場人物と比較するならヘイズは、コンプソン家のジェイソンの男といえるだろうか。ジェイソンは愛車を駆って町中を狂おしく走り回るが、決して時間通りに事を成し遂げられぬ男だ。

ヘイズもまた熱狂的なドライバーである。そもそも待てぬ男であるヘイズにとって、車のもつ機動力はなくてはならぬものである。故に彼は（例によって）衝動的に買い求めた灰色の愛車エセックス号をさまざまに賞め讃え、「良い車をもっていれば誰も正当化される必要などない」²とさえずる。自動車は彼に機動力ばかりでなく、彼の唯一のプライベートな空間をも与えてくれる（WB. 59）。つまり彼にとって車は動く家でもあるのだ。激しく移動する車にやすらぎの場を見出さねばならぬということが、本当の家からは見捨てられた謂わば「みなし子」的な彼の状況をきわだたせる。この「みなし子」的な状況は、常に落ち着きのない衝動的な彼の性格と内面で結びつき、彼の人格を形成していると考えられる。

小説の最終部で彼の愛車は警官によって谷底につきおとされ破壊されてしまう。直後ヘイズは、もう帰るべき場所もそして是非行ってその目で見なければならぬ場所もなくなったといわぬばかりに、石灰で（これまた性急に）両眼を潰し、下宿で苦行中の隠者の如き生活を送り始めるのである。

待てぬ人ヘイゼル・モーツの怒濤の如き衝動的行動は最終章を除く小説全体に見受けられ、その激烈さと性急さが全篇のトーンにさえ決定的な影響を与えている。しかしインペイシエントな彼にとっては、なかでも到底我慢のできない出来事が小説中二度起る。その時の彼の怒りの爆発は、ジェイソンの遣り場のない欲求不満の怒りとは較べようのないほどに烈しい。

まず一方の事件はヘイズとうりふたつの「真の預言者」を名乗る怪しげな男が彼の目の前にあらわれたことである。当時、ヘイズは愛車で町中を走りまわっては、辻々で車のボンネットや屋根の上から彼独自の「キリスト抜き教会」（the Church Without Christ）への賛同を町の人々に熱烈に説くという毎日を送っていた。そこへ度々彼の説教の邪魔をする山師フーヴァー・ショーツが、どこで探し出したのか、容貌は勿論、帽子を常にかぶっている出立から結核のひどい咳に至るまで全くヘイズにそっくりというソラス・レイフィールズなる人物を連れてやってきたのだ。そしてフーヴァーはソラスを「真の預言者」としておしたてヘイ

ズの「キリスト抜き教会」に対抗して「キリスト抜き聖キリスト教会」(the Holy Church of Christ Without Christ) というふざけた名の教会を説かせるのであった。ヘイズの怒りはあまりに凄じくソラスを車で執拗に追い回し、無惨に轢き殺さねばおさまらない。そして彼はソラスの息の根を完全にとめてしまったことを確認するとうとう吐きすてるようにつぶやくのだ。「俺が我慢できないことが二つある……本物でない奴と本物の奴をふざけてまねる奴だ」(WB. 105)。

ヘイズにとって「本物の奴をふざけてまねる奴」とはソラス・レイフィールズのことであるのは明らかである。ならば他方の「本物でない奴」とは何か？ヘイズが再び烈しい怒りを爆発させるのはこの「本物でない奴」に対してでなければならぬ。作中、ヘイズにとって「本物でない奴」とはからからにひからびてミイラ化した人間の死骸のことである。このミイラは、そもそも町の中心の森にある博物館におさめられていたものを、町でヘイズが知り合った少年イノック・エマリーが盗み出してきたものなのだ。イノックは、出会った当初よりどうしても初対面とは思えぬヘイズ・モーツという男が「キリスト抜き教会」の辻説法の中で、人々の手によって祭り上げられ事実上過去の遺物と化したイエス・キリストにかかわる「新しいイエス」の到来を熱烈に訴えるのをきいて、そのミイラをどうしてもヘイズに渡さねばならぬと思った。そこでわざわざ美術館より盗み出してヘイズの下宿まで届けたのであった。同棲している娘サバス・ホークスが留守のヘイズにかわってこの「贈り物」を受けとる。サバスは包みをとくと中味がミイラだったので仰天するが、やがてその不気味さにもなれて、「わたしたちの赤ちゃん」と呼んで抱きかかえる。そこへヘイズが戻る。サバスはミイラに「ダディのおかえりよ、赤ちゃん」と話しかける。ヘイズはミイラの中に何を見たのか、いきなりそのミイラの頭をわしづかみにしてサバスの腕から奪いとり壁に投げつけ、それでも足りぬと窓の外へ放り投げてしまう(WB. 96)。

実はヘイズがこのミイラを見るのはこれで二度目である。一度目は「あんたに是非見てもらいたいものがある」というイノックに連れられ、博物館のガラスケースに入っているのを見たのだった。が、その時ヘイズは腰をぬかす程驚きはするがそれを決して怒りにまかせて打ち壊すことはしなかった。ならば、その同じミイラが今度はサバスにみどり児のように抱かれ、彼の息子としてさしだされた時に、何故ヘイズは抑え切れぬ怒りを抱いたのか？この問いに答えることで我々はヘイズ・モーツのインペイシェンスの本質に至ることができるのだ。

まずイノックにとってこのミイラとは何を意味したか。イノックはこのミイラ

が彼の孤独でみじめな生活に「何か」(it)をひきおこす「鍵」となるものだと理解していたことに注目すべきだ(WB. 88)。そしてその「何か」が行なわれたあとイノックは「よりよい人格」を備えた「全く新しい人間」となり、皆から祝福の握手を求められるのだという幻想を抱いている。また彼はその「何か」とはこのミイラをヘイズのもとに届けることによって完了すると考えていた。だからヘイズに「あんた以外の誰にもこいつは見せられないよ。あんたはどうしてもそれを見なきゃならないんだ」(WB. 47)とヘイズに打ち明けていたのである。イノックはこのミイラこそヘイズの説く「新しいイエス」だと信じているのだ。イノックは実際それを「新しいイエス」と呼んでもいるからだ。とすればヘイズ自身もまたそれが、少なくともほんの一瞬、本当の「新しいイエス」に見えたのではないか。そしてそのミイラが「本物でない奴」であることがわかった時、インペイシェントな彼の怒りが爆発したのである。サバスはイノックによって届けられたミイラを眺めて「『こんな人以前に会ったことはないんだけど、この人の中には私を知りあった誰もがみなすこしずつはいつかいるのよ、まるでその人たちがひとつの身体におしてまれて殺されてしなびてひからびちまったみたいだわ』」(WB. 94)と言っている。万人の罪を我が身に負って処刑されたイエスを我々に想起させずにはおかない表現ではないか。つまりイノック(=受胎告知天使)によって届けられたこのミイラは、サバス(=聖母マリア)によって生殖を経ずしてヘイズの息子としてさし出されるに及んで、いよいよヘイズにとって彼の「新しいイエス」のにせ物、皮肉なカリカチュアとなり得たのである。

『賢い血』にはこうしてキリスト誕生というドラマのあまりに醜いデフォルメが在る。ヘイゼル・モーツのインペイシェンスは彼によって狂おしく待ち望まれる「新しいイエス」、新たにこの目で見、この肉体で体験しなければおさまらぬイエスが待てども現われぬところに端を発する。つまり神が彼のために再びイエスをつかわすことによって開かれるべき恩寵への道が閉ざされているところにそのインペイシェンスの原因があるといってもよいだろう。

しかし最終章のヘイズは一転してあの絶叫調の説法をやめ沈黙し、ほとんど下宿にこもって石ころやガラス片をしいた靴をはき有刺鉄線を胴にまきつけじっと痛みを耐え忍ぶという生活を送り始める。この突然の変化をもたらしたのは、彼のインペイシェンスの有弁なる象徴としての愛車エセックス号が破壊されるという事件である。ヘイズはこの事件を機に(ターニングポイントとなる事件にしてはインパクトに欠け、やや強引すぎるといふ印象は否めないが)両眼を潰すことによって外界を一切

遮断し肉体を超えた魂による真に神に至る道の烈しい求道者となったのである。³

つまりヘイズが目を潰すという行為は作品中、きわめて深い意義を与えられているわけだ。この目で見、耳で聴き、肌で触れられるものが我が世界の全てであり、それ以外は如何なるものであろうと — 従ってイエス・キリストによる贖罪をも — 徹底して否定するヘイズにとって、なかでも目は最も明確な証しを提供し得るという点で最も重要な肉体の器官であった筈だ。そして作家フラナリー・オコナー自身、目を全人格の中心であり、芸術の本質である神秘の具体化のためのあらゆる検査の要点であると考えていた。⁴ 秘儀の顕現を検索するための目とは、烈しく神の恩寵を求めてやまぬヘイズのそのインペイシェンスの直接的な原因となっていると考えられる。聖パウロにならって自ら視力を奪うというヘイズの行為は、肉体的な衝動としてのインペイシェンスの段階を脱却し、キリストの奇蹟によって魂の目を新たに啓かれることを烈しく待ち望む精神的なインペイシェンスの領域へ自ら参入するという他に他ならない。

秘儀と目との関係で我々容易に想起し得るのはエマソンの例の「透明な眼球」の件りであろう。エマソンは肉体の一切を滅却しインペイシェンスの直接的な原因である目に全てを一挙に集中しようとする。ハロルド・ブルームはこれを「エマソンの神秘主義」と名付け、神秘主義をこう定義する。「神秘主義とは……神が自らの姿をあらわすのを待つための忍耐をもたぬことだ。」⁵ しかし、神秘主義とキリスト教信仰は等号では決して結べない。そこで、ヘイズは両眼を潰すという行為によって肉体的なインペイシェンスの域を超え信仰としてのインペイシェンスの域へ^{イニシエイト}と参入されたのである。かくしてヘイズは自らに烈しく苦行を課しつつイエスによる神の恩寵の到来を信じ待つという真にキリスト者としての生を送ることになるのだ。

最終章に登場するヘイズの下宿の女主人フラッド未亡人はオコナーの作品にしばしば描かれる「善人」である。「善人」の自分に満足して無反省に生を送る、オコナーによって断罪されねばならぬ人物である。しかしこの作品においてはそうではない。逆に彼女は、小説の決末部、ヘイズの死体を前にして、わずかばかりではあるが神の啓示の光明すら受けとっているように見えるではないか。ただ真の神の祝福に至る道は彼女に対して「入口でさえぎられているかのようにみえる」。それでもなお確かに見えるその「ピンの先程の光」はやがて彼女にはヘイゼル・モーツその人自身となって見えるのであった(WB. 120)。つまり、「善人」フラッド夫人を、断罪されみじめな死を死ぬべき彼女を少なくとも真にキリスト者の生きる道に覚醒する契機を与えたのはヘイゼル・モーツの死なのである。

キリストが自らの死によって幾万の人々の罪を贖ったことと比較するべくもないが、ヘイズはその死によってひとりの人物に自らの罪深き生き様を自覚させ、救いの道につく、わずかではあるが、可能性を与えたのであった。しかし、フラッド夫人にとってこの針の先程の救いの光明へ至る道は事実依然として入口でさえぎられているのであるから、今度は彼女自身がヘイズの跡を継いであの烈しくインペイシェントな生を生き抜く挑戦をすることになる筈である。ヘイゼル・モーツのインペイシェンスは彼の死を通して確実にフラッド未亡人へと受け継がれつつあるのである。

The Violent Bear It Away : Francis Tarwater, the Violent

フランシス・ターウォーター少年は天上より主なる神に召されることをひたすら信じ、その時を今か今かと狂おしく待ち望んでいる。神に召されるその時は究極の自由が約束されるのだと純粋に信じている。しかし無邪気な彼にもただひとつの気掛りがある。それは彼の大伯父であり、彼をひきとって預言者としての教育を施している「ターウォーター爺さん」によって、その真の自由は実はイエス・キリストによって保証されているのだと教えられたことだ。少年は神のお召しは彼にだけ直接に届けられるべきで、イエス・キリストという他者の存在は彼が神を直接体験するのを妨げる悪意に満ちた夾雑物であるかの如く感じずにいられない。⁶

一方、このターウォーター老人は不思議な神秘的体験以来、自らに預言者としての使命を課し、「囲まれた土地」パウダーヘッドにこもって後継者を養成する事に一生を費している。つまり彼は外界より隔絶されたこの土地にあって所謂習俗から我が身を孤立させ少年と同様に神の直接的な啓示を烈しく待ち望む人物であるのだ。しかしこのパウダーヘッドが少年にとって習俗の全てであり、キリストを拝する教義としての体系的なキリスト教へと導く全ての世界であるから、烈しく攻める生を送るこの老人が逆に少年にとっての敵意の対象と化することになる。少年ターウォーターは神と自らの直接的な結びつきを阻むかのようなイエスとの関係をターウォーター老人との預言者の「狂気の血」によるいかにしても断ち切らねばならぬ絆と重ね合わせて理解している (VA. 135)。

ターウォーター老人がその志半ばにして死亡する直後よりこの小説は始まっている。小説の第一部こは少年が老人の遺言通りに遺体を埋葬する場面が描かれ、同

時に少年の心に次々によみがえってくる老人の思い出がフラッシュバック的に挿入される。従ってこの第一部は既に死体でしかない老人が印象としては前面に押し出された支配的存在となっている。ターウォーターは老人と約束した埋葬の仕事を途中で放棄して（実際は、近所に住む黒人がかわって老人の遺体を十字架のもとに丁寧に埋葬してくれるのだが、ターウォーター少年はそれを知らない）、彼にとって悪意の具現としての習俗の形成にあずかるターウォーター老人との「烈しい血」による絆を断ち切り、まさしく神を直接的に体験するべく「囲まれた土地」パウダーヘッドを打ち破って外の世界に旅立つのである。外界で少年を待ち受けるものは何か、少年を巡るその冒険が描かれるのが第二部である。

その外界に少年ターウォーターと対決するべく待ち受けていたのは、オコナーの所謂「善人」、盲目的にキリスト教的習俗のぬるま湯に安穩とつかった、彼女によって厳しく断罪されるべき人物ではない。そこに登場するのは少年の母方の叔父、ターウォーター老人の甥にあたる教師レイバーなる人物である。このレイバーも実は少年時代、老人によって預言者としての洗礼を受けるためにパウダーヘッドで教育される筈であった。しかし彼は少年とは違って即座に家族の手によって町へ連れ戻され、以来冷厳なる非キリスト者として人生を歩み続けているのだ。彼が救い難い「善人」であることから免れているのは、皮肉にも、彼が冷たい合理主義的な非キリスト者であるからだ。レイバーは教師としてこのターウォーター少年をパウダーヘッドの伯父のもとから救い出そうとする。一度はピストルで老人によって撃退されてしまう。しかし今度は老人が死んで少年自らそこを飛び出してきたのであるから、これを迎えてひきとり、老人の如き狂気の預言者などにはではなく、自身と同様に理性と教養の社会的人物に育てようともくろんでいるのだ。

レイバーは、実はターウォーター少年同様、ターウォーター老人のあの「狂気の血」を受け継いでおり、「烈しく攻むる者」と「合理的なる者」の二つに引き裂かれた自我にさいなまれている（VA. 207）。この「合理的なる者」という後天的に獲得した半面の自我は、彼自身気付いているように、キリスト者であることを意識的に拒絶することによって保証されている現世的、ニヒリスティックな理性である。従って第二部に展開される対決は、ターウォーター老人の教えを身につけ自らその束縛を打ち破ってきた「烈しく攻むる者」の申し子と冷徹なる非キリスト者との対決となる。まさしくそれは社会制度としてのキリスト教会という外的介在物を一切そぎおとした神の恩寵に対する純粹な信念とニヒリスティックな合理主義との

熾烈な対決となる筈である（技巧上の問題で、つまり、きわめて宗教的なモチーフを作品に盛り込むにあたってオコナーは、この小説が見え透いた寓話や説教書の類いに墮することを非常に恐れた。その結果、ターウォーター少年、レイバーが所謂リアリスティックな人物として仕上ってはいるものの、この宗教的 — オコナー流に言えば神秘的な — 主題を完全には担い切れない人物にとどまっているのも明らかである）。

レイバーとターウォーター少年の対決は、レイバーの息子で白痴の子ビショップを巡って行なわれる。実はレイバーが神の恩寵に対する信仰を排除し、つまり「烈しく攻むる者」の血を抑圧し、現世的理性を持続しつつ一見「平穩さ」を保持しているのはこの白痴の少年の存在故である（VA. 230-31）。一切の恩寵から見放された白痴が、レイバーの体内にも流れる癒し難い血の烈しい衝動の生きる反証として存在する限り、彼は現世的合理的な生をかりうじて送り続けられるのだ。一方、ターウォーターにとってビショップは如何なる存在か。自分こそ神のお召しを受ける人物と確信し、神の声を今や遅しと烈しく待ち望んでいる少年ターウォーターにとって、神の恩寵の实在を堅く信ずるほどに、ビショップが脅威として彼の目に映ることになる。神の恩寵の存在を前提として遡及的に「烈しく攻むる者」の血の価値は確立されるのであるなら、その恩寵の手の及ばぬ無時間の地獄に突き落されながら生き永らえることで神の不在証明をつきつけるビショップを、その烈しい血を分かちもつ者は皆神のもとへ彼等の烈しいバプティズムによって送り届けねばならぬだろう。老ターウォーターはそれを試みて失敗した。レイバーもまた一度は抑えきれぬ半面の烈しい血に促され、我が子に溺死というバプティズムを行なおうとさえした。が、失敗した。その後レイバーは「合理的なる者」として、神への道を拒絶し非キリスト者としての生を徹底して送る決意をせねばならなくなる。三度目の挑戦で、今度は少年ターウォーターが、ビショップに死の洗礼を施すことに成功する。ターウォーターのレイバーに対する勝利は、神を求めてやめぬ烈しい野心が現世的理性を圧倒したということを意味する（『賢い血』のクライマックスもそうであったが、主人公を真のキリスト者への道、つまり信仰の生へと導く契機となる事件のインパクトが弱い。この小説の場合、前作のヘイズの愛車エセックスの破壊とは比較すべくもない白痴の溺死というショッキングな出来事が起るのだが、なお物足りない印象を読む者に与えてしまう）。

ヘイゼル・モーツは彼の肉体的インペイシェンスの象徴である車の破壊から、その肉体的インペイシェンスの直接的原因である目を奪うという烈しい行為にで

た。ターウォーターに対して、彼を一挙に真の魂のキリスト者の信仰へと飛躍させるために用意されている事件は、ターウォーターが、その埋葬の途中で放棄し、さらに火をはなして一切の絆を断った筈と信じていた老ターウォーターが、パウダーヘッドに帰ると、実は十字架のもとに埋葬されていることを知らされるという事件である。ヘイズにとっての社会制度として形骸化したキリスト教会にあたるのが、少年ターウォーターにとっては、すなわち彼の習俗の全てを占め、神の直接的体験を阻む夾雑物として認識されていた老ターウォーターとの絆であった。ところがその老人が十字架のもとに神に召されていったのである。ターウォーターにとって老ターウォーターとの血の絆は、自らと彼にとってはやはり夾雑物としての他者にすぎないイエス・キリストとの絆との深い関連においてとらえられていたことを思い起すべきだ。こうして今やイエス・キリストとのその絆を通し神の恩寵へと到達するのだという神祕がターウォーターに開示されたのだ。この大伯父の死様を通してイエス・キリストに対する真の認識を得た少年ターウォーターは故老ターウォーターより受け継いだ「烈しい血」の命ずるままに、真のキリスト者、烈しい預言者の生を送ることになる。彼の眼下には彼のあの壮烈なバプティズムを待っている筈の子供達が眠る夜の町がひろがっている。

Mystery and Manners : Children of Ahab

フラナリー・オコナーは「習俗を通して秘儀を具体的に表わすのが小説の務めである」と考えていた。オコナーの習俗とは何か、また秘儀とは何か。

オコナーの習俗とはまずきわめて地方的色彩の濃いものであることは疑いの余地がない。オコナーはジョージア州に住む自身の作品が「より大きくさらに意味も深い範疇——南部文学」に属していることを「幸いなこと」と述べている。

その第一の理由は、小説家の目的がコミュニケーションであるからだ。コミュニケーションの本来的な意味は、彼女自身の言葉を借りて言えば、「一つのコミュニティの中でもものを言うこと」であると理解される。しかしそのコミュニケーションの本来の意味が安直に認識されているが故に、南部には「大河と小川の両方を合わせた数よりアマチュア小説書きが多い」のであり、「森は郷土の作家で満ち、そんな仲間になりはしまいかというのが、真剣な南部の作家の誰もが抱く非常な恐怖なのである」。こうした郷土作家の仲間の一人に墮するのを避ける唯一の方法は、オコナーによれば、「自分の良心を検索し、南部の激越な、し

かし消滅しかけている習俗を、一つの究極的な関心に照らして観察することだ」となる（MM. 51, 28-9）。

第二の理由は作家の想像力の問題である。作家の想像力が真に価値をもち得るのは、それが彼自身によって実際に生きられた習俗に対し明晰かつ鋭敏な観察にもとづいた的確な判断を与えられた場合のみである。従って南部作家が土地を離れて帰らずじまいでいる場合、「彼は主義と現実あるいは判断の間の均衡を崩す大きな危険を承知でそうするよりほかはない」のであり、結局、「土地と疎遠になった想像力は理論の毒にやられる」ことになるのだ（MM. 52）。

つまり南部作家であることの利点は、オコナーにとって、南部自体を作りあげている独特の習俗がもたらす利点である。この南部の習俗は第一に、良心を厳しく検索し得る作家に対して真にコミュニケーションに値し同時に完全にコミュニケーション可能な題材を提供する。第二に、作家がその題材を作品に定着させる際に、必要な人物関係や背景設定を醸し出し得るように彼の想像力を刺激的確に導き得るといふことなのだ。

この南部的習俗の価値の源泉は具体的には何処にあるのか。文学にとっての南部の有利さとは、他のアメリカの地域と較べて、「その質の程度、強烈さの度合」が異なることだ、とオコナーは述べている。偉大な文学を養うに足る南部的習俗のその強烈な性質は、彼女によれば、南北戦争における敗戦という類稀なる体験より生みだされる。

……単に、負け戦というのはいい題材になるということではない。真意は、われわれ南部人が原罪による人間の墮落にも比すべき経験をもったということなのだ。われわれは人間の限界の認識を胸に焼きつけて、現代世界へ踏み入ったのだった。新生の無垢の状態の中では決して育たない神秘へ向う感覚を身につけて、南部は現代に入ったのである。もしこの墮落の経験がなかったら、神秘に対する感覚が十分には成長しない点で、南部はアメリカの他の地域と大差はなかったにちがいないのである。（MM. 57-8, 傍点後藤）

まず南部の習俗をより強烈なものとする南北戦争における敗北がオコナーによってきわめて宗教的なコンテキストによって読みとかれていることに注目せねばならない。南部の習俗を特徴づけているのは、南北戦争の敗戦によって殆んど肉体的にさえ実感され得るような原罪による墮落、つまり神との癒し難い分断の意

識である。人は神のもとへは如何にしても到達し得ない、という「限界の認識」とは、神と人間との間に永遠に黒々と横たわる深淵の存在の認識である。しかし、オコナーにとって神はキリスト教的愛の神であって、その深淵を彼岸へと飛躍しようと烈しく攻め続ける者を一切顧みない冷酷な、例えばメルヴィルの抱く神とは異っている。オコナーの神は、絶望的な断絶を認識した上でなお真摯に彼岸を目指すものにその愛にあふれる姿を垣間見せることがあるのだ。烈しい上昇志向的エロスが、突如、神のアガペーによって報いられる（その報いは人間の側に価値判断を容易に許す性質のものではないが）可能性が決して皆無でないオコナーは信じている。つまり、オコナーの習俗とは、絶望的な深淵の彼岸にある神に焦点を合わせ、その限界に至るまであるいは至ってなお、烈しく生き抜かれねばならぬものであるといえる。それではその限界への到達以降は？ それ以降はやがて顕現されるに違いない神の技に関することであり、オコナーの言葉で言えば、それはもはや神秘の領域に属することなのである。

『白鯨』のエイハブ船長はこの烈しく攻めるものたちに先駆ける者である。メルヴィルは『白鯨』においてエイハブにその深淵の彼岸にはたして神は在るか否かという究極的な挑戦をさせているのだ。エイハブは彼岸と此岸の間に立ちふさがる怪物、「白い壁」、モービー・ディックを突破せねばならぬのだ。オコナーの文脈で言えば白鯨は習俗から一切が神の技、神秘にゆだねられる転換点に存在していると考えられる。⁷そしてその白鯨の白さはエイハブの目には彼岸の一切の象徴の如く映る。しかし白い壁の向うに神はあるのか、いや、何も無いのかというデモーニッシュな意志に取り憑かれたエイハブにとってはその白さは同時に戦慄の無の象徴とすら思え彼をはてしなくさいなむのである。白鯨の白い壁の向う側、人間と神とを気の遠くなるほど隔てる深淵の彼岸に対する知を烈しく求めてやまぬエイハブには、神の技をどこまでも隠蔽し尽くす白鯨がついにはてしない悪意の具現と思えてくるのだ。かくしてエイハブは敵意をむきだしにして烈しく執拗な白鯨攻撃を開始するのだ。

ヘイゼル・モーツを見よ。彼は敵意に満ちている。彼の敵意はイエスによる救済を教えられるままに信じて疑わぬ周囲の人々に向けられる。さらにそれは「善意」の人々によって彼等を自らの命とひきかえに救ったと信じられている「イエス」に対する敵意である。彼がイエスの新たなる到来を説きながら、「新しいイエス」のにせ物としてミイラと遭遇した時のあの怒りの凄じさを思い起されよ。このエピソードによって我々は、ヘイズの敵意の対象、烈しく攻める者にとっての悪意を秘めた存在とは、実は贖罪を真に成し

遂げたイエスその人ではなく、イエスを語り騙る人々 — イエスを過去のものとして祭り上げ、遠くから崇め奉るシステムを作り上げ、逆に人間を隷属させてきた^{インスタリテューション}制^度としてのキリスト教会 — であることを理解する。そこでヘイズは自らの肉体で、その目で、耳で、イエス・キリストを新たに経験せねばならぬと愛車エセックスの上から熱烈に説教して町中を巡ったのである。ヘイズが「俺が説いているのはキリスト抜き教会だ」と言い放つ時、その烈しい敵意の対象として彼の念頭にあったのは「キリスト教会」と銘打たれながら決して人を神との間の絶望的な深淵という限界の認識に導くことのない、謂わば安全な安穩とした教会の存在であったに違いないのだ。フーヴァー・ショーツがソラス・レイフィールドに唱えさせ、ヘイズの徹底的な怒りの対象となったあの「キリスト抜き聖キリスト教会」とは、この現在勢力をふるっているキリスト教会に対する強烈な皮肉として、オコナーによって、企図されたものなのだろう。

しかし、ここで注目すべきは、オコナーが習俗とよんで自らの作品の題材、精神的源泉としたのが、きわめてキリスト教的色彩の濃いもの、というよりキリスト教的生の営みそのものであったことだ。従ってオコナーの習俗は、神秘に向けて烈しく生き抜かれることによって真価を発揮するものであると同時に、此岸の限界に至るまで長々と介在して神秘への飛翔、直接的な神の体験を妨げてやまぬものであることになる。つまり真にキリスト者として覚醒するものは、所謂「キリスト教徒的生」に対して常に敵意を抱かねばならぬというパラドックスが生じる。習俗はこのようなパラドックスを孕むが故に常に新たな局面を呈示しつつオコナーの想像力に挑みかかってくるのだ。ターウォーター少年が老人から受け継いだ烈しく攻める者の血によって、彼の習俗である老ターウォーターと囲まれた土地パウダーヘッドを打ち破りながら、同じくその烈しい血故に老人の指示した通りに白痴ビショップに対して死の洗礼を果し、老人も歩んだ預言者への道を実に歩み始めているというこのパラドックスが思い起されねばならない。

最後に再び『白鯨』とオコナーの二長編小説とを比較しその相違をきわだたせ、より包括的に作家オコナーの地位を位置づける助けとしたい。

『白鯨』の結末が明示する通り、白鯨の白い壁はエイハブによって決して突破されず、白い壁の向う側の神は事実上開示されることはない。メルヴィルの神は白い壁の此岸の世界に対して冷たい沈黙を守るばかりで、神と人との断絶は何をもってしても癒されることはない。このメルヴィルの傾向はあの暗澹たる『ピエール』を経て後の作品でさらにその度合を強める。白鯨の白い壁はすくなくともこ

れを突き破る挑戦に価するものを秘めていた。バートルビーが向いあった刑務所の壁はどうか。八方ふさがりの窒息的ニヒリズム以外にこの壁が白鯨の壁のように善であれ悪であれ何か豊かなものを孕む可能性をいささかでも残しているだろうか。結局、メルヴィルの神は少なくとも認識論的には不在である。しかし、逆に、この豊かな象徴の泉である白い壁、白鯨を徹底的に追いつめ、その結果、神は死の沈黙を守っているという秘密をつきとめ得たのは、エイハブというデモニッシュな意志に取り憑かれた人物の壮絶さ、オコナー流に言えば、烈しさの故に他なるまい。そしてエイハブの究極的知を求める壮烈さは、作家メルヴィルの人間の限界認識に至るまでの習俗に対する観察の鋭さ、判断の深さによって保証されるものであるだろう。『白鯨』という作品は作家としてのメルヴィルの想像力が神の沈黙を雄弁にかつ壮大に語る物語となっているともいえるだろう。

一方オコナーの神は此岸からは絶望的な深淵に隔てられてはいるものの、此岸にその光明を投げかける可能性を確実にひめている。オコナーの神は最終的には慈愛の神に他ならない。恐らくはオコナーにとってこの愛の神の認識が全てに先行するものだったのだ。神の側からアガペーの手をさしのべてくる可能性が皆無でない以上、印象としては習俗の果にある人間の限界も『白鯨』の白い壁よりはずっとこちら側に設定されているようにさえ見える。従って人間の限界よりこちら側の、つまり習俗の部分はメルヴィルのそれと較べて深まりと奥行きに欠けているように見え得るのだ。オコナーは「神秘の具体化が芸術の本質である」と言う。神秘は、しかし、オコナーの場合、自ら顕現されるものであるなら、すくなくとも神の恩寵の手の届くところまで烈しく攻め得る者を造りあげればよいとすら言える。オコナーの習俗の枠内にはエイハブという巨人はいかにしてもおさまりきれぬだろう。それはエイハブが既にミステリアスな、神秘の領域に足を踏み入れた巨人であるからだと誤解されるべきではない。それは神のとらえ方がメルヴィルとオコナーとでは異なるからだ。従って習俗のスケールが両作家では決定的に異なるからだ。

しかし、実際には二人の神認識に以上のような図式的等級づけがなされよう筈がない。オコナーはメルヴィルに決して劣ることのない、いや彼以上に、苦悩する神秘の追求者であり、習俗への挑戦者であった筈だ。ならば共に烈しく攻め求める人物を描きながら、両作家の作品のこの印象の相違は何処から生じてくるのか。彼等が生きたそれぞれの時代背景の相違も大いにその原因となり得るだろう。しかし、思うに、それは第一に彼等の描く習俗の地域的特性の相違にもとづ

くものである。オコナーの描く習俗は南部的なきわめて宗教色の濃いものであったことは以前に述べた。南北戦争の敗戦によって人間の原罪を殆んど肉体的に追体験し得るのが彼女を育んだ習俗であったのだ。つまり、宗教的な神秘への移行を比較的容易に許し得る習俗を南部は形成しているといえるのだ。オコナーの習俗は神秘に対して、距離的にではないにしても、関係としての密接度のきわめて高いものであったと推測し得るのだ。一方メルヴィルは、オコナーの南部に較べより散文的な、またより散漫かつシニカルな北部のもつ習俗から神秘の領域へと至る可能性を探求せねばならないわけである。従ってメルヴィルは神秘を具体化するためにより厳しく反省的に自らの習俗を検索せねばならなかったであろう。逆に南部という土地にあっては、オコナーのように宗教的題材をとりあげることはきわめて的確であって、的確でありすぎるためにそれが小説作品に定着される際に、その題材の究極的な価値を問い直すことがもはや不可能とさえ言えるのではないか。つまり南部は宗教作家に偉大な作品を残し得る土壌を提供する一方で、その作家自身を偉大な作家にすることを逆に困難にし得るといえるのではないかと思う。

1987年盛夏

註

1. Herman Melville, *Moby-Dick; or, The Whale*, 田中西二郎訳, 『白鯨』 (1952; 東京:新潮社, 1982), 上 p. 273.
2. Flannery O'Connor, *Wise Blood*, in *Three by Flannery O'Connor*, introd. Sally Fitzgerald (New York: Signet, 1983), p. 58. 以下同書の引用は上記に依り, 本文引用括弧(WB.)内に頁数を記すことにする。拙訳。
3. Frederik Asalas, *Flannery O'Connor: The Imagination of Extremity* (Athens, Georgia: Univ. of Georgia Press, 1982) pp. 52-3, pp. 55. 上書によって筆者は基本的なオコナー解釈のパースペクティブを得た。
4. Flannery O'Connor, *Mystery and Manners*, 上杉明訳, 『秘儀と習俗 — アメリカの荒野より』 (東京:春秋社, 1982), pp. 86-7. 以下同書の引用は上記に依り, 本文引用末括弧(MM.)内に頁数を記すことにする。
5. Harold Bloom, *The Anxiety of Influence* (New York: Seabury, 1976), p. 49. 本文に訳出した箇所を以下に参考のために記す。
"Mysticism, . . . , has not the patience to wait for God's revelation of Himself."
6. Flannery O'Connor, *The Violent Bear It Away*, in *Three by Flannery*

O'Connor, p. 126, p. 128, p. 135. 以下同書の引用は上記に依り本文引用末括弧 (VA) 内に記すことにする。拙訳。

7. 寺田建比古、『神の沈黙—ハーマン・メルヴィルの本質と作品』（東京：沖積舎，1982），esp. p. 21, p. 96. この箇所を参考のために実際に引用しておく。「『モウビ・ディック』（一八五一年）における，主人公の白鯨との死闘の目標はまず，＜白い壁＞の突破にある。白い壁とは，根源的自然の壁，内在と超越との接線の意味である。」（p. 21）「けだし，白鯨の白さは，内在と超越との接点，あるいはその転換点である。真に究極的なものの究極的な探索は，この転換点に身をもって立つことによって，その白い壁の突破によってのみ，はじめて可能となるだろう。」（p. 96）筆者はこの論文を構想するにあたって同書より大いにインスピレーションを得た。また『白鯨』の基本的理解においても同書に依るところが大きい。